

管理・企画・デザインで《多業化》、 子育ても

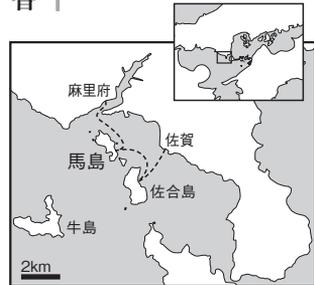
「うましまCOLOR」運営／イターン 藤田枝里香

近所づきあいを求めて島へ移住

もともと私は生まれ育った広島で広告制作の仕事をしていました。一日のほとんどをパソコンの前で座って過ごし、夜遅くなることが多い生活でした。アイデアを出したり、デザインをつくったりするのは楽しく、街中で自分の成果物を見つけるとやりがいを感じていましたが、不規則な生活で身体を壊し、辞めることにしました。

その後、人と触れ合いながら仕事をしたいと、心機一転上京し、テーマパークで働きました。たくさんのお客さんに接する毎日がとても楽しかったです。

しかし、東日本大震災で交通が麻痺したり、店から物がなくなる経験を経て、近所づきあいもなく、土地勘もない場所で再びこのようなことが起こったらと恐怖を感じまし



馬島：田布施町麻里府港から南へ2.6km、瀬戸内国立公園の中にある島。面積0.7km²、周囲5.8km、人口29人(平成30年7月末現在)。平安時代から馬を飼育する馬牧として「馬飼いの島」とよばれ、後年馬島となったとされる。島内にキャンプ場があり、海水浴や釣りなどの観光客が多く訪れる。

た。また、帰省は年に一、二度で、このままでは親が生きているうちに会える回数は数えるほどしかないと考えたことから、実家にも近く、近所づきあいができる、自然豊かな場所での暮らしに思いが至りました。

その頃、婚約していた今の主人と話し合って、温暖な瀬戸内海のどこかへ移住しようということになりました。

主人の母から田布施町の「地域おこし協力隊」募集について教えてもらい、活動エリアの馬島を知りました。さっそく役場に話を聞きに行き、船に乗って島へ。海は透き通っているし、島内はきれいに草刈りされていました。未舗装の草の道のエリアもあり、心が躍りました。景観を乱すような看板もなく、過剰に観光地化もされていなくて、こは純粹に自然を楽しめる美しい場所だと感動しました。その日は夕焼けを見ることができ、その光に照らされた草

たちまでもが輝いていて、すぐにこの島の虜になりました。同時に、人口が三〇人しかないこと、住民の七割以上が七〇歳以上ということを知り、なにか島の力になりたい、この美しい島を存続させたいという使命感にかられました。平成二五年に夫婦で協力隊に就いてからは、前職の経験を活かして、町のパンフレットなど宣伝ツールをつくりました。また、島にあるキャンプ場の運営補助（整備や清掃、接客）も担いました。

ゴールデンウィークや夏休みは多くの人で賑わうのに、過ごしやすい他の時期にお客さんが少ないのもつたいなく感じていました。二〇年ほど前には、島で年に一回、一〇〇〇人が来るような大きなイベントをしていたそうです。その頃は、島の皆さんも若く、漁師さんも何人もいてとても賑わっていたとのことでした。

訪島者を増やすためにイベントを開催

来島者を増やすために、そして住む人を増やすために、どうしたらいいのか。私たちには何ができるのか。「地域おこし協力隊」に対する周りの期待が高くなりすぎて、結果の出ないプレッシャーに押しつぶされそうな時もありました。

試行錯誤の末、収穫体験とキャンプ場での野外調理を組み合わせたいイベントを試みることにしました。島の方に貸していただいた半世紀使われていない耕作放棄地を開墾し、

初心者でも失敗しにくいというジャガイモを植えました。何もかもが初めてで、島の方や県庁の方に手伝っていたり、教えていただきながらの一年目の冬でした。初回のイベントは二年目の六月に行ない、知人や友人が来てくれました。同年秋に行なった二回目は収穫物をサツマイモにし、四〇人ほどが集まりました。その後、収穫物にタマネギを加えたり、町内の企業と連携して味噌や豆腐づくりのイベントも開催しました。

参加者同士と一緒に収穫したり料理をするので、自然と会話が生まれ、終始なごやかな雰囲気で、とても素敵なイベントになりました。リピーターもいらつしゃいますし、苦手だったタマネギが食べられるようになった、家でもお手伝いするようになったなど、お子さんに関する嬉しい声をたくさん聞いています。

これまでは日帰りイベントでしたが、今年は初の宿泊型で行ないました。キャンプ場があるという島の良さをうまく活用できたのではないかと自負しています。

また、島の自然を遊び尽くしてほしいという思いから、協力隊三年目に「うましまこどもキャンプ」をはじめまし



収穫体験&野外クッキングイベント「もぐもぐ」にて。

た。普段は子どもはおろか、若者もない馬島ですが、ご縁がつながって山口大学のキャンプサークルの方々にスタッフで来てもらい、実現することができました。親御さん不在の子どもたちだけのキャンプです。年齢も住んでいるところもバラバラな子どもたちがチームに分かれて二、三日寝食をともにし、最終日には「帰りたくない」と皆、口を揃えます。このキャンプは、募集後すぐに定員の四〇名が埋まる大人気イベントになりました。普段は習いごとや宿題などで大忙しの子どもたちですが、島では自然の中で思いきり遊べるので喜んで参加いただけている気がします。

この二つのイベントは、三年間の協力隊期間を終えた今も、主人と立ち上げたユニット「うましまCOLOR」で企画と運営を継続して行なっています。馬島のファンが少しでも増えたらいいな、多くの人の心のふるさとなれたら嬉しいなと思います。

小さい島だからこそできる仕事と子育ての両立

協力隊時代に、この地域で飲まれている豆茶というお茶を栽培、焙煎し商品化しました（現在は販売休止中）。

三年前には「うましまデザイン室」を立ち上げ、主にオフシーズンにデザインの仕事をしてきました。今も町内の企業の商品ラベルをつくったり、島や地域のパンフレットや観光マップを作成したりしています。

キャンプ場、イベント企画、デザイン、子育てのバラ

スが今はちょうど良いと感じています。これも馬島だからこそできたことだと思います。

繁忙期は、二歳の娘をキャンプ場に連れていってイスやテールブルを洗うときに水遊びさせたり、島の方に娘の面倒を見ていただきながら接客することもあります。夫は、島で仕事や子育てをしつつ、週二日は本土に働きに行くという生活です。

イベント参加者との交流はかけがえのないものですし、実施後に感想を聞くとやめられません。企画から実行に至るまでには、悩むことも多々ありますが、来る人に楽しんでいただけるように、張り切って取り組んでいます。

ともに島で活動する人を増やしたい

人口が増えてほしい一方で、すぐに住める空き家がないことが馬島の課題です。協力隊の時に二軒の空き家を確保し、県内本土の方の入居が決まったのですが、実際には別荘のような使い方をされていて島の方々との交流がなく残念に感じています。

この島には伝統的な行事も残っています。年四回執行行



オフシーズンを中心にデザイナーとしても活動。地域のパンフレットや観光マップのデザインも手がけている。



島からのメッセージ

●島の将来を支える若い夫婦へ期待

私は、30年前に大きい希望と目的を持って故郷の馬島に帰ってきた。自分の幼少期に200人を超えていた人口は半分以下となっていた。まず、島を盛り上げようと「うましま荘」という貸別荘を建てた。それから行政も動いて馬島にキャンプ場がつくられた。島の漁師や有志が集まって1000人以上が来るような大きなイベントも数年やったし、芸能人をゲストで呼んだこともあった。

県内の山奥の村から「集客力を上げたい」との相談があり、その村の祭りに皆で魚を持っていき、売ったこともあった。そのつながりで神楽を演じに馬島に来てくれるような交流もあって、とても活気づいていた。

その頃は「人口が50人を切らんようにしよう」と話していた。しかし、40人を割ったと思ったら、あっという間に30人を切ってしまっていた。30年前にすでに高齢化と人口減少は進んでいたが、今や自分も高齢(73歳)になってしまい体力的にも陰りがでてきた。島の男性は90歳が3人いて、今までがんばってきた人たちがいなくなり、その下が自分になってしまった。これから何かやろうにしても無理はできない。

そんななかで、藤田夫妻の活動は一筋の光だと思う。島に来て2年目に島のキャンプ場の芝生の上で結婚式を行い、島の住民はほぼ全員が参加した。町長をはじめ両家の親戚や友人たちも集い、盛大に行なわれた。そこでは藤田夫妻の「これから島で暮らしていく」という決意が感じられた。

島の行事や草刈りも積極的に参加してよくやっている。キャンプ場のパンフレットやホームページを刷新したり、こどもキャンプなどを企画したりと、新しいことに取り組んでくれて、キャンプ場の客数も年々増えている。

そして、何よりも子どもが生まれたこと。馬島ではじつに44年ぶりのことだ。その子がいることで周りが明るくなった。純真無垢な子どもは島の皆を癒す。泣いても笑っても可愛いものだ。今後も藤田夫妻の若い力に期待したい。

(馬島自治会長 西村光昭)

藤田枝里香 (ふじた えりか)

広島県廿日市市生まれ。実家が駄菓子屋で幼い頃から接客が好き。デザイン会社、テーマパークでの勤務を経て、平成25年に地域おこし協力隊として馬島に赴任。翌26年に結婚した夫・敬太郎は協力隊の同期。子ども好きが高じて独力で保育士免許を取得。現在は島のキャンプ場でスタッフをしながら冬場はデザインの仕事をしている。1児の母。

なわれる馬島八幡宮のお祭りは、極度の高齢化により継続が危ぶまれています。道普請やお宮の掃除も年々難しくなっています。

島には仕事も家もないから、人を呼べないし来ないだろうと諦める人もいますが、このご時世、場所を選ばない仕事をされている方もいますし、家を自分で改装して住む方

もいらつしやいます。そんなたくましい人たちに、馬島の存在を知ってもらえたらと願っています。本土から一〇分もかからない島で定期船は一日六往復あるので、本土へ通勤することもできます。養蜂をしてもいいだろうし、シーズン限定のカフェを開いてもいいかもしれませうし、島を元気にしてくれる方をお待ちしています。